

楽曲解説

解説 = 神部 智

- 2/23 (金) 第902回サントリー定期シリーズ
 2/25 (日) 第903回オーチャード定期演奏会
 2/26 (月) 第115回東京オペラシティ定期シリーズ

2/23

2/25

2/26

シベリウス (1865-1957)

交響詩『フィンランディア』 op. 26

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス(1865-1957)の代名詞ともいえる交響詩『フィンランディア』は、1899年に初演された舞台劇『歴史的情景』の最後を飾る「フィンランドは目覚める」の付随音楽が原曲である。翌1900年、ヘルシンキ・フィルのバリ万博遠征公演のプログラムに載せるため、シベリウスは同付随音楽を単独の交響詩『フィンランディア』へと改編。ただし同年7月2日にヘルシンキで初演された際は、支配国ロシアの検閲を配慮して《スオミ》(フィンランド語で「フィンランド」の意味)のタイトルが用いられている。

「フィンランドは目覚める」の情景は、「ロシアの圧政に抗するフィンランド、その輝かしい未来」を描いたものであり、『フィンランディア』もその内容を受け継いでいる。曲は激しい金管楽器の咆哮で始まり、やがて闘争のファンファーレも聞こえてくる。すると一転して明るい曲調になり、勇壮な調べと敬虔な賛歌の対比を軸にしながら終結部のクライマックスへ向けて力強く駆け上がっていく。なお、曲の中間部に現れる有名な賛歌は後に合唱曲《フィンランディア賛歌》へと改編され、人びとに大変親しまれるようになるが、指揮者レオポルド・ストコフスキーはその美しい旋律を「全世界の国歌」と呼んだ。

【作曲年代】 1899-1900 【初演】 オリジナルの劇付随音楽:1899年11月4日 ヘルシンキのスウェーデン劇場にて、作曲者の指揮による／交響詩版:1900年7月2日 ヘルシンキ消防隊ホールにて。

【楽器編成】 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル)、弦楽5部

グリーグ (1843-1907)

ピアノ協奏曲 イ短調 op.16

1868年に作曲されたエドヴァルド・グリーグ(1843-1907)唯一のピアノ協奏曲は、作曲者25歳の時の作品である。きわめて充実した協奏曲であり、初演時から今日に至るまで世界中で愛され続けてきた。清澄なロマンティズムにあふれたこの曲は、しばしばシューマンのピアノ協奏曲と比較される。事実、グリーグは1858年にクララ夫人が演奏するシューマンの協奏曲を聴き、「忘れられない印象」と述懐している。また1870年、ローマでグリーグと面会したリストが、グリーグの持参したピアノ協奏曲の手稿譜を初見で弾いて、「これが真の北欧だ!」と絶賛したエピソードも有名である。

初演時より大好評を博したグリーグのピアノ協奏曲は、出版に際して何度も修正の手が加えられた。これまで計5種類の楽譜が出版されているが、今日広く用いられているのは1917年に出版された改訂第4版である。それはグリーグが亡くなる1907年、作曲者自身が生前最後の改訂を施した版と考えられている。

この協奏曲には、ピアノの名手でもあったグリーグの独創性が随所に見出される。それと同時にきわめてノルウェー的でもある。たとえば険しいフィヨルドの風景を思わせる第1楽章冒頭の印象的なピアノ・ソロや、第2楽章のさわやかな北欧的叙情は、まぎれもなくグリーグ独自のサウンドである。また、第1楽章の主要主題や第3楽章の随所にみられる舞曲的要素には、祖国ノルウェーの民謡や民族舞踏を心から愛してやまなかった作曲者の心情が現れている。そうした多様な要素が巧みに交差しながら音楽はドラマティックに展開していき、最後は雄大なクライマックスを迎える。

[作曲年代] 1868年 [初演] 1869年4月3日 コペンハーゲンのカジノ大劇場にて。

[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

シベリウス (1865-1957)

組曲『ペレアスとメリザンド』 op.46

ベルギーの詩人メーテルリンク作『ペレアスとメリザンド』(グリペンベルイ訳のスウェーデン語版)の劇付随音楽。1905年3月17日にヘルシンキのスウェーデン劇場で初演され、大きな反響を呼んだ。メーテルリンクの物語は、アルモンド王国の神秘的な城が舞台。ある時、老王アルケルの孫ゴローが森の泉のほとりで謎めいた乙女メリザンドに出会う。二人は結婚するが、やがてメリザンドはゴローの異父弟ペレアスと愛し合うようになる。それに激しく嫉妬したゴローはペレアスを刺し殺す。弱り果てたメリザンドも女の子を産み落とした後、「ペレアスを愛していましたが、罪は犯しませんでした」とゴローに語り、そっと息を引き取る……。

この夢幻的、暗示的な名作劇に、シベリウスは10曲の付随音楽を創作。その研ぎ澄まされた書法は、2年半後に発表される交響曲第3番にも通ずる要素であり、ヘルシンキを離れてヤルヴェンパーのアイノラに移住したシベリウスが目指した新しい作風の一端をのぞかせている。

各曲は単に物語の雰囲気やニュアンス、印象を綴るのではなく、輪郭のくっきりした旋律と洗練された表情で、それぞれの場面のエッセンスを一瞬にとらえる。一つひとつの曲はまるで俳句のように限りなく切り詰められているが、音の節制が劇の背景や余白をかえって際立たせ、いっそう奥深いイメージ世界に観者を誘う。つまりシベリウスはすべてを自己表現せず、対象との距離を微妙に見きわめながら、より大きな世界に身を任せて存在そのものに本質を語らせようとする。そうした姿勢がこれまで以上に鮮明化しているのが、劇付随音楽『ペレアスとメリザンド』である。

なお、上記の付随音楽をコンサート組曲にさっそく改編したシベリウスは1905年11月、『ペレアスとメリザンド』作品46を出版する。それに伴い、作曲者は付随音楽の第9曲を削除したほか、「3人の盲目の姉妹」の女声独唱をクラリネットに置き換えることにした。さらに、糸を紡ぐメリザンドを描いた付随音楽の第5曲を7番目に移したが、それ以外はほぼ原曲のままに組曲版としている。

[作曲年代] 1905年 [初演] 劇付随音楽版:1905年3月17日 ヘルシンキのスウェーデン劇場にて、作曲者の指揮による / 組曲版:1906年3月12日 ヘルシンキ大学講堂にて。

[楽器編成] フルート(ピッコロ持ち替え)、オーボエ(イングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル)、弦楽5部

2/23

2/25

2/26

シベリウス(1865-1957)

交響曲第7番 ハ長調 op.105

シベリウスの番号付き交響曲としては最後の曲となる第7番は、交響的形式に対する作曲家独自の考え方が、きわめて鮮明な形で現れた作品である。紆余曲折の末、最終的に単一楽章形式が取られたが、伝統を逸脱するそのユニークな構成により、1924年3月24日の初演時からしばらくの間、交響曲第7番ではなく「交響的幻想曲」というタイトルが付されていた。その後、出版に際して番号付き交響曲の系列に取り入れられている。

シベリウスが交響的幻想曲のタイトルを撤回した要因の一つに、初演当時の評論家たちの保守的な反応も指摘されるべきだろう。たとえば、シベリウスに対してつねに敵対的な態度を取ったスウェーデンの音楽家ペッテション＝ベリエルは、「この作品は『カレワラ』を題材としたこれまでの交響詩と似た雰囲気を持っているので、詩的想念を指し示す具体的なタイトルが付けられたら、曲の内容がもっと明快になるだろう」と述べている。そうした無粋な見方に対して、「磨き抜かれた抽象性」こそが作品の生命線と考えたシベリウスは、聴き手に誤解を与えかねないタイトルを厳しく封印。あえて「第7番」に変更したとみられるのである。

作品の規模は20分あまりだが、伝統的な交響曲の各楽章の要素、性格(緩徐楽章、スケルツォ、フィナーレなど)が巧みに内包されている。曲の前半と中盤、終盤に登場する雄々しいトロンボーン主題の「提示」「展開」「再現」を柱としながら精妙に進行していき、最後はハ長調の和音で神々しく結ばれる。すべての楽想は凝縮された構成のなかで生命体のように力強く息づくと同時に、堅固な形式の構築にも寄与しており、その鮮やかな筆致は幽玄なる趣きさえたえしている。シベリウスの第7番は、交響曲史上でも他に類例がないほど研ぎ澄まされた造形美を誇る傑作といえるだろう。

[作曲年代] 1924年3月2日完成 [初演] 1924年3月24日 ストックホルムの楽友協会コンサートにて、作曲者の指揮による。

[楽器編成] フルート2(1番、2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

かんべさとる／茨城大学教授。ヘルシンキ大学大学院博士課程修了。博士(音楽学)。大阪大学、宇都宮大学、国立音楽大学講師を歴任。また各大学の公開講座、市民講座の講師をはじめ、NHK番組の出演・監修など、多方面で活躍している。著書に『シベリウスの交響詩とその時代:神話と音楽をめぐる作曲家の冒険』、『作曲家◎人と作品:シベリウス』(以上、音楽之友社)などがある。